

## ずっしり重い「軽い支部例会」—実践報告例会—

牧野満（奈良ブロック）

### 1. 力不足が明らかだったグループ学習研究

私は2002年度～2004年度の3年間、研究部長として支部研究を任されました。1年目はグループ学習研究を、2年目、3年目は実践研究を進めてきました。

グループ学習研究は、1999年から3年間、澤口研究部長の計画の下で研究が進められてきたのですが、どうして途中で私と交代したのかその辺りは定かではありません。グループ学習研究という研究課題を引き継ぐ事になったのですが、これは私には大変重荷でした。どの様な研究ができるのか見通しが持てない中で始まった研究でした。グループ学習研究の足跡については、前稿で書いた通りで、私が任された1年間は、生活指導とグループ学習の関連を探ろうとしました。全生研の先生を招いて興味深い話が聞けたのですが、違いが分かっても関連が分かりませんでした。そして、全国大会で報告するようになっていたようで、4年間の支部グループ学習研究の成果を広島大会で報告しました。「生活指導と同志会の実践を同じ土俵で比べること自体無理がある」などの批判を受け、悲惨な報告として終わってしまったのでした。グループ学習に力を入れていない者が、グループ学習の研究の中心に立って研究を行うのは無理がありました。当初に決めていた通り、1年間でグループ学習研究を終える（終えられる）ことになったのでした。

### 2. グループ学習研究から実践研究へ

この様な状況だったので、新しいものを見出し、研究を深めると言うのは、自分の力量からして到底無理であることがよく分かりました。そこで、奈良大会までの2年間を実践

研究という分かりやすい研究テーマに設定しました。

実践研究を始めることになったきっかけは、他にも次のような理由があります。

第1に、大阪支部にはこれまでも優れた実践が開発されており、同志会内外問わず様々な所で報告されています。しかし、それらの実践が、肝腎の大阪支部内ではあまり知られておらず、また、支部会員がそれらの実践で授業を進めたり、追試を行ったりするようなケースは極めて少ないのが現状でした。大阪支部の実践に、同じ大阪支部の人間が学ぶと言う当たり前のことをしようと思ったのでした。

この原因として、同志会の実践に共通することだと思いますが、実践のわかりにくさが挙げられます。実践の時間数に関しては、何十時間もかけた実践が一般の人に受け入れられるとは思えません。大単元学習こそ「同志会らしさ」と言う声もありますが、解説を交えなければ理解できない実践が広まるはずがありません。計画段階で実践をスリム化し、追試可能な実践に再構成することが何よりも必要だと考えました。自分の実践を振り返り、同志会用語を極力避け、会外の人が聞いても、分かりやすく作り直すことをお願いしました。具体的には、15時間プラン（15時間以内で実践を終えること）をお願いしました。

第2に、報告される実践が小学校を対象にしたものに限定されていたことが挙げられます。グループ学習研究の時もそうでしたが、研究対象となるのは、小学校実践がほとんどでした。実際に会員でも小学校教師が多く、実践を理解するには適していますが、実践は小学校に限ったことではなく、幼稚園や保

育所、中学高校、特別支援学校、大学など、人数の差はあれ、日々の体育の授業を行っています。校種によっては、全く知らない世界でもあるので、学校の組織や日々の活動を理解することも含めて、実践報告を聞くことそのものを目的としたのでした。やりたい実践があっても、学校や学年の条件、職場の人間関係によって、思うように実践が出来ないこともあります。実践の枷となる困難をどう乗り越えて、実践を可能にしていたのか、実践者の生き様そのものに学ぶことができると考え、実践報告の周辺の状況も、実践報告から読み取ろうとしたのでした。

研究テーマを掲げて、それを明らかにしていくという研究スタイルと言うよりは、実践研究は、プロジェクト、ブロック、個人の実践に寄り添い、大切にしているものを引き出しまとめていこうという研究でした。

第3に、これが一番大きな理由だったのかもしれませんが、2005年奈良大会を控えていたということです。奈良大会では、入門教室を含めて22の分科会があり、それぞれの分科会を支部の若手会員が担当し運営を担ってもらいました。単なる世話役ではなく、各分科会のこれまでの経緯や研究の到達点を学び、主体的な運営をお願いしようと考えていました。そのためには、まず、どのような実践がなされているのかを、支部例会を通して知らせ、そこから興味をもった分科会を担当してもらおうことを考えていました。そのためには、扱う教材も多岐に渡る方が良く、同志会の分科会では、どのような報告がなされているのかを知らせる必要がありました。

### 3. 実践報告例会の方針

構えることのない「軽い研究部」でスタートし、あくまで実践報告をたっぷり聞いて、参加したものが意見を述べ合う。

このようなテーマを設定して、奈良大会ま

での2年間の研究をスタートさせました。実践報告会中心の支部例会を「実践報告例会」と命名して、2年間で13本の実践を計画しました。大阪支部の各ブロックや、プロジェクトで練られた実践について、報告をできる限りわかりやすく報告することを、報告者にはお願いしました。支部例会では、報告された実践について、例会参加者が集団的に論議してきました。分からない同志会用語を極力使うのを避け、初参加者を大切にす運営に心がけました。実践については、研究部員はもちろん、必ず分析批評を実践に関わってこられたブロック、プロジェクトの方にお願ひしました。これらをまとめたものを、169頁にも及ぶキックオフ35号「奈良大会記念号」として書籍化しました。

### 4. 実践報告例会の足跡

実践報告例会は、2年間で13本の報告がありました。ここには、プロジェクト、ブロック、個人の実践が含まれています。

#### 第1回 健康教育プロジェクト(2003.10.18)

「ぼくたち、わたしたちが人類を環境ホルモンから守る!」(上野山小百合)

#### 第2回 (2003.11.29)

「6年車いすバスケットボール～バリアフリーからユニバーサルへの試み～」(牧野満)

#### 第3回 障害体育プロジェクト(2004.4.24)

「赤ずきんちゃんゲーム」「ボール取りゲーム」

～発達の視点から子どもに教えた中味を考える～(辻内俊哉)

#### 第4回 健康教育プロジェクト(2004.4.24)

「子どものエネルギーが親たちの心を開いた!みんどこ(小1性教育)」(伊藤真理)

#### 第5回 豊能三島ブロック(2004.5.22)

「カリキュラムづくりを視野に入れたフラッグフットボールの実践」(楠橋佐利)

#### 第6回 泉州ブロック(2004.6.18)

- 「スポーツとジェンダー」(中川豊)  
第7回 舞踊プロジェクト(2004.6.19)  
研究報告「荒馬で大切にしたいこと」  
(前田雅章)
- 第8回 幼年体育プロジェクト(2004.10.11)  
「天狗は自然の味方～ほんと?うそ?ごっこの  
取り組み～」(染矢みゆき)
- 第9回 水泳プロジェクト(2004.11.6)  
「1年生の水泳を異質協同のグループ学習で  
～遊んでいる子も巻き込んで～」  
(中川孝子)
- 第10回 南河内ブロック(2005.2.11)  
「田植え走をして考えてみた～板ふみ走はど  
うだろうか～」(東條憲二)
- 第11回 中河内ブロック(2005.4.23)  
「側転の実践からマット運動のカリキュラム  
作りへ～側転ができない子どもたちから、系  
統的な指導を訴えかけて～」(澁谷友和)
- 第12回 市内ブロック(2005.5.20)  
「5年生のマット運動学習」(片本宏茂)
- 第13回 球技プロジェクト(2005.5.20)  
「じゃまじゃまサッカーからミニサッカーゲ  
ームへの道」(山本雅行)

報告された実践は、発達別では、幼年、障  
害児体育、小学校であり、教材では、短距離  
走(板踏み走)、水泳、マット運動、サッカー、  
フラッグフットボール、健康教育(環境ホル  
モン)、荒馬、車いすバスケットボール、体育  
理論(スポーツとジェンダー)と、多岐に渡  
る教材を扱ってきました。

2年間の実践研究では、実践を丁寧に読み  
解くことに重点を置きました。例会では、参  
加者が実践の意図を理解することを第一とし、  
実践報告→質問と感想(研究部が討議の柱立  
て)⇒討議(討議の中で実践分析の報告)とい  
う大まかな流れで実践報告会を進めてきま  
した。

当然、報告の時間が長くなって、討議に費  
やす時間が少なくなってしまいました。討議

が盛り上がりの兆しを見せかけた所で、時間  
切れとなってしまふことが何度かありました。

「実践がよく分かった」という声があるもの  
の、研究の深まりという点では物足りないとい  
う面もあったようです。

また、当初のねらいとしては、報告された  
実践を再構成することにあつたのですが、実  
践報告を聞いてまとめることで精一杯で、実  
践を分かりやすく作りかえるまでには至りま  
せませんでした。

#### 4. 実践報告例会から見えてきたこと

13本の実践報告をから見えてきたことが  
幾つかあります。

1つ目は、大阪支部の実践の特長は、「子ど  
も発」のコテコテの実践だと言うことです。  
報告された実践は、教材や運動文化の側と言  
うよりは、子どもの生活課題から教材化され  
ている実践が多く、今の子どもたちの抱える  
課題を垣間見ることができました。その典型  
が健康教育の「対話の授業」です。考えさせ  
るたくさんの資料を子どもに与え、子どもの  
興味関心に寄り添いながら授業が展開してい  
きます。「環境ホルモン」の実践は、その後様々  
なテーマで報告されることになる健康教育実  
践の礎となる報告でした。また、掲示板から  
実践の経過を報告し、集団で授業づくりの参  
加し、他者の意見も取り入れながら授業を展  
開するという手法も斬新でした。

2つ目は、「発達」の視点を持てたというこ  
とです。幼年体育の実践や障害児体育の実践  
では、生活年齢、発達年齢ということが話題  
になりました。実践を「発達の視点」で見  
ていくことが意識づけられたのではないかと思  
います。同志会の実践は、金太郎飴の嫌いが  
あります。例えば、マット運動ならどの学年  
でも動物歩きをしています。「子どもが喜ぶか  
ら」ではなく、やはり学年に相応しい教材化  
が望まれます。どの発達年齢には、どのよう

な教材が相応しいのか、教育課程を考えるための材料として、個々の報告が生かされました。

3つ目は、教育課程の発信です。楠橋フラフト実践、澁谷マット実践は、教育課程づくりをテコに、職場に働きかけています。実践を職場に広めていくためには、わかりやすい提示が必要です。教育課程作りは、同志会実践のわかりにくさを克服していく作業であることを教えられた気がしました。この間、提案してきたことは、15時間以内(できれば10時間程度)で収められる実践にすることです。同志会実践は、何十時間もかけた超大単元学習が多いのですが、これでは一般化しません、もっと「わかりやすい形で実践を創る」ことは意識づけられたようでした。作成した教育課程を参考にしながら。更にわかりやすく実践を作りかえる作業が必要であるという総括を行いました。

## 5. ずっしり重い「軽い支部例会」

これは、キックオフ 35号(奈良大会記念号)の編集後記につけられたタイトルです。榊原氏(奈良大会編集局)が、2年間の支部研究を次のように評されています。

『新たな方針で取り組まれた2年間の支部例会後半期の成果が形になった(前半期は34号に収録)。検討の素材を支部内の各ブロック:プロジェクトに負うという意味で「軽い」と自称しているが、研究部は「授業分析の方法を確立させる」という明確な目標をもっていった。例会に際しては毎回論議の柱立てをし、すべての実践報告に実践分析と実践批評が付された。「軽い支部例会」方針は、そういう責任の取り方を徹底した。「各分野の様々な実践をまとめる作業そのものが支部会員の力量を高める」との戦略とも相俟って、方針は素直な学びを促したように見える。そこに当然ではあるが多様な実践が供された。結果、大阪

の実践は「子ども発」で、「生活課題から教材化」され、「発達の視点」を持ち、「教育課程を視野に入れている」などが「再認識」される(牧野・巻頭言)。「軽い研究部」には、全国大会開催の重圧がかかりはじめ、重い研究に一息つきたいとの率直な思いもあった。重い研究部は、各ブロック・プロジェクトが自律的に展開した実践研究から、「やりたいことをやるのが一番」との隠されたメッセージを受け取ったのではないか。』

支部研究で初めに考えたことは、2年間のテーマでもあった「軽い支部例会」でした。実践を聞いて、感想を述べ合う、肩肘を張らずに気軽に参加できる支部例会にすることに心がけました。私自身、グループ学習研究の時のような重圧もなく、実践をしっかりと聞くことができましたし、毎回の例会を楽しんで運営できました。

しかし、実践報告そのものは決して「軽く」なく「ずっしり重い」報告でした。様々な校種、発達段階、教材の実践報告から、今の同志会の研究の方向性に触れることもできたからです。例えば、支部の幼年の先生たちは、支部よりも全国の幼年分科会とのつながりが深く、幼年実践を聞くと言うことは、全国レベルの「ずっしり重い」話を聞けることになります。13本の報告は、研究の最先端の情報を得ることにつながっていたのです。

現在、学校や職場を取り巻く状況が厳しくなり、じっくり実践を作る時間的な余裕を失っています。支部例会は、実践に寄り添った例会を余儀なくされていますが、これは決して実践のレベルが低いだとか、新しいものを作れないからダメだとかいうものではありません。実践報告から職場の状況を汲み取り、更にその向こうにある教育の課題を見出すためにも、実践報告例会は意味のある一つの例会の在り方であったと思われるのです。